

3. 大分県における戦国期城郭の特徴

千田 嘉博

国立歴史民俗博物館 考古研究部助教授

はじめに

大分県教育委員会によって実施された中世城郭の調査によって県内の中世城郭の様相がはじめて判明した。多くの県で中世城郭の悉皆調査がすでに行われているが、大分県の調査は質の高さ、遺構概要図（いわゆる縄張り図）の精度の高さで特筆される。重要な点は単純に平坦面（曲輪）や堀を確認しただけでなく、城郭としての構造分析資料として使用可能なレベルで一貫して全県的な中世城郭の概要図を揃えたことである。

こうしたことはいずれの県の悉皆調査でも目標とされてきた。しかし多種多様な地形に立地し、時には踏み込むことさえ困難な植生に覆われた膨大な数に及ぶ城郭跡のひとつひとつについて、城郭構造分析の結果としての縄張り図を高いレベルで等質的につくり上げていくことは、きわめて困難である。ひとつひとつの図面の背後にそうした苦心をはっきりと見て取れるだけに、調査の実務を担われた方々に心から敬意を表したい。

それでは縄張り図の質の高さは、何をもって評価したらよいのだろうか。本報告書の刊行以前には、県内の中世城郭の構造を分析できる資料集は存在していなかった。こうした状況を想起すれば、曲輪や堀の配置の概要がわかるだけでも大きな前進といえる。しかしそうした質の図面集成では、図面から城郭構造の特性を読み取ることができない。

そこで求められるのが、ただ個別の曲輪や堀を把握するだけでなく、曲輪と出入り口、そこから伸びた城道による曲輪群の連結の如何、堀・堅堀・土塁と曲輪との連関の如何、それらの総体から生み出された城郭構造の組み立ての如何を的確に読み取って、適切に図化した図面の集成である。わたくしが本調査を高く評価するのは、こうした諸課題に応える図面集成を実現しているからである。

本報告書は今後、中世城郭跡の保護と整備の基礎資料となるばかりでなく、大分県の中世を城郭から考えるための最も重要な資料集になるだろう。本稿では、この調査で明らかになったいくつかの特徴的な城郭構造について述べ、検討を加えてみたい。

1. 城道と出入り口

出入り口のない城郭は存在しなかった。しかし地表面観察や、時には発掘調査を行ってもなお城道や出入り口の位置がはっきりしないものは少なくない。全国的には戦国期になれば出入り口が顕在化し、堀や土塁・石垣を組み合わせることで防御力を高めたものが多くなっていった。

杵築市の竹の尾城（201）は、削り残した厚い土塁の間を出入り口として設定していた。意図的に横矢（防御のために敵の側面から矢や鉄砲などを放つこと）を狙ったわけではないが、城道が土塁を取りまくようになっていたので、単純だが効果的な出入り口になっていた。

武蔵町の吉弘城（232）は、堀底道になった城道がまさに城域に入った部分の真上に土塁囲みになった武者隠し状の陣地を置いた。出入り口そのものは単純であるが、みごとな縄張りである。また佐伯市の八幡山城（359）は、城域の中央に鮮やなくい違い虎口を備えた。一見ひじょうに進んだタイプの出入り口であるが、城道が尾根上から見下ろされる位置になっており、くい違い虎口の出撃性の高さを活かしていなかった。

院内町の副城（167）は典型的な館城の形態であるが、戦国期に多重の横堀と畝状空堀群を付加して要塞化を進めたことが読み取れる。東に向いた主郭の出入り口は四角く整った土塁で防御されており、櫓があったことが推測できる。出入り口を出た城道は北へ屈曲したのち曲輪群を守った土塁の上をスロープ状に伸びており、上下の曲輪の連携もよくできていた。

出入り口は城道を屈曲させて守る方法から、出入り口と空間を組み合わせる機能させるようになっていった。それが近世城郭の枡形へと最終的に行き着いたのだが、大分県の戦国期城郭にも、そうした虎口空間の展開を確認することができる。

山香町の日指城（267）は城域南東の堀を土橋で渡ると、矩形に土塁で囲んだ虎口空間があった。虎口空間のなかでさらに城道を屈曲させて主郭へ進ませたところなど、よくくふうしていた。この出入り口を避けて北側斜面に回り込もうとした敵には、対岸に土塁を配して塹壕状にした陣地を曲輪に沿って設けて備え、南側斜面からの回り込みには土塁を長く伸ばして対処した。たいへん手慣れた洗練された縄張りといえる。しかし主郭の削平が不十分な点を考慮すると、砦としての要素が高い。また佐伯市の榎牟礼城（362）は主郭群南方の出入り口に堅堀を添えた2重の虎口空間をもった。一見大づくりではあるが、発掘を行えば細かな配慮がつかめるに違いない。

大分県の戦国期城郭で特徴的なのは堅堀や畝状空堀群と出入り口を組み合わせたものがあつたことである。豊後高田市の屋山城（033）は、城城南西にこの城全体の出入り口をもった。ここでは堅堀の底を伝う城道を設定し、堅堀で狭めた空間を進んで出入り口にとりつくようになっていた。出入り口だけを取り出せば、特筆する点はないが、畝状空堀群との組み合わせ方の巧みさは出色である。近世城郭にはつながらなかった防御方法であるだけに貴重である。

2. 畝状空堀群

畝状空堀群は北は青森・秋田県から南は熊本・宮崎県まで広くおよび、戦国期山城に限って使われた特徴的な防御施設であつた。大分県内の戦国期山城にも多くの畝状空堀群を見ることができる。院内町の妙見岳城（172）は永禄年間に大友義鎮が改修した城で、大分県内ではもっとも初期の畝状空堀群と考えられる。妙見岳城の畝状空堀群は曲輪直下もしくは腰曲輪の下の斜面に堅堀を連続は位置したもので、畝状空堀群の形態としては古く初期の導入例にふさわしい。臼杵市の水ヶ城（308）、日田市の財津古城（501）なども同様の形態である。

またすでに堀があつたところに畝状空堀群を加えることで防御力を高めた例も見受けられる。宇佐市の山本砦（107）、直入町の松牟礼城（498）の畝状空堀群は堀切りの外側に畝状空堀群をさらに布設したものであつた。興味深いのは大分市の小岳城（300）で、もともとあつた帯曲輪を破壊して畝状空堀群を築いていた。段々の帯曲輪による防御から畝状空堀群を用いた防御への変化を読み取れる。それは帯曲輪に分散的に城兵を配置した防御方法から畝状空堀群上の主郭に城兵を集中配置したことを意味しており、防御システムの集約化を物語る。

発達した形態の畝状空堀群は大分市の鶴ヶ城（299）に見ることができる。主郭西側の斜面に設けた畝状空堀群は頂部を横堀でつないだものになっており、進化のようすがわかる。すべての畝状空堀群がそうしたタイプに変わってはいないが、新しい展開の方向性は明らかである。この城は1586年（天正14）に府内防衛の拠点として改修されたことが確実であり、実年代を押さえられる例として重要である。

3. 縄張りと築城主体

城の曲輪の形態、あるいは曲輪群の連結方法の如何は、築城主体の権力構造のあり方をよく反映した。こうした特徴を利用して中世の城跡から地域の政治や社会の構造を検討していくことが可能である。最初に述べたように今回の調査成果が高く評価されるのは、そうした歴史研究の資料集として使用に耐えるものだからである。だからひとつひとつの図面から実に多くの歴史的検討ができる。ここではいくつか特徴的な事例を瞥見したい。

野津町の鍋田城（413）は、ルイス・フロイスが農民が立て籠もつた城と記述した城である。国道建設工事で遺構がかなり破壊されていることが惜しまれるが、神社が建つ主郭の北方に小さな腰曲輪状の削平段が連なっていたことはわかる。小屋掛けの段の集合体を基本性格にし、領主の館を核にした館や城とは形態が著しく異なつたことが読み取れる。現在残る遺構を「村の城」と評価してよいだろう。

安心院町の佐田城（177）は、ひじょうに大規模な山城である。佐田城は大きく7ヶ所の城郭群が複合してできた山城であつた。佐田城は1498年（明応7）に大友氏が佐田古城を攻めた際、佐田氏が飯田山とともに佐田山の所々に陣を設けたことが知られている。分散的な曲輪群の立地は所々の陣という文書の記述とまさに一致しているが、現在残る遺構は石垣を備え、横堀をもち、堀の何カ所かには横矢の屈曲を見ることができるから、明らかに戦国末期である16世後半のものと考えざるを得ない。

7ヶ所の曲輪はいずれも削平が不十分な点を残すこと、堀などの規模が小さいことから陣もしくは臨時の砦として築かれたことがわかる。ただし曲輪の各所に裏込めをもたない石積みがあり、要所を効果的に固めたことがわかるから、臨時のものとはいえ、最終段階の佐田城は一定の期間使用することを念頭に築いたものであつた。

それぞれの砦は相互に連携しながらも一応独立した形態になっていた。そして谷筋が開けた南西方面を一貫した防御正面にした。尾根の端部に築いた砦はいずれも堀切りをもち、腰曲輪を経由するかたちの出入り口を備えた点で一致しており、現状の形態は同時期に成立したと考えられる。

それに対して最高所に占地した中心の砦は、塹壕としても使つた横堀をほぼ全週させ、その要所に堅堀を組み合わせるといったより進んだ縄張りを確認できる。そして中心砦の主郭は明らかに矩形を意識した曲輪取りをしており、ここが佐田城を構成した砦群のうちで、もっとも高位の人物の本陣であつたと考えて間違いない。

周囲の砦群との構造の違いにはそうした築城主体の階層差を表した部分もあるが、無視できない防御施設の発達差があることから、基本的には時期差と考えるべきである。するとこの城の歴史は、1. 現在遺構が確認できない1498年の所々の陣（砦）群としての佐田城、2. 戦国期のある段階の分散・分立的な佐田城、3. 中心砦を横堀と堅堀で飛躍的に強化し、周辺砦とともに石積みを導入した戦国末期の今見る佐田城という、少なくとも3段階におよんだ佐田城が積み重なつていくことが推測できるのである。

たいへん印象的なのは、最初の佐田城から今地表面で見えている最終段階の佐田城まで、いずれも城郭プランは、分立・分散的という基本構造を踏襲しつづけたことである。このことはいくつかの画期はあっても、築城主体の分立・連合的権力構造が少なくとも15世紀末から16世紀末の100年間に渡ってつづいたことを物語る。それは佐田氏の権力構造、あるいは宇佐郡の一揆的な領主権力の構造と深く関わったと評価される。

いずれにせよ佐田城は地域にとって連合して籠城すべき山城として長く認知され、最終的にはこの地域の連合的な領主権力が達成し城郭構造の到達点を示す山城と位置づけられる。佐田城は近世城郭の本丸を中心とした階層的な構造とは正反対の分立・分散型の城郭であったが、それがこの地域の戦国期権力にとって重要なことだったのである。

おわりに

鍋田城や佐田城をはじめ、本書で明らかにされたすべての城郭は、さまざまな築城主体がそれぞれの城郭を重層的に築いていった中世社会の実像をわたくしたちに語りかけている。しかし中世の城郭はほとんどが土づくりであり、適切な植生の管理、雨水の処置などをしなければ次第に滅失してしまう。わたくしたちが山で薪を拾わなくなり、また林業も衰退したことで、いま中世城郭跡の多くは荒れ果て、大きな危機に瀕している。

ひとつでも多くの城跡が地域の人びとに意識されるものとなり、保護され、次の世代によりよいかたちで伝えられることを願いたい。深い歴史を秘めた大分県の中世城郭をどのように保護し、活用していくのかの選択は、県民にゆだねられている。